王道を駆け抜けたみんなの愛馬

キタサンブラック 伝説

小川隆行
ウマフリ

特別インタビュー
「背中を振り返る」
武豊騎手

夢とロマンを乗せて王道をゆく!

常識も血統も関係ない!一戦ごとに力をつけ、みんなの愛馬となった感動の蹄跡がここに甦る!

キタサンブラック伝説

王道を駆け抜けたみんなの愛馬

小川隆行＋ウマフリ

星海社

266

SEIKAISHA SHINSHO

目次

プロローグ「汝、自身を知れ」 3

第一部 キタサンブラックかく戦えり 12

[世紀の大一番]

菊花賞 2015年 14
ジャパンカップ 2016年 20
天皇賞・春 2017年 26
天皇賞・秋 2017年 32
有馬記念 2017年 38

[新馬・条件・オープン戦&重賞レース]

3歳新馬 2015年 46
3歳500万下 2015年 48
スプリングステークス 2015年 50
皐月賞 2015年 3着 52
日本ダービー 2015年 14着 54
セントライト記念 2015年 56
有馬記念 2015年 3着 58
産経大阪杯 2016年 2着 62

天皇賞・春　2016年 64
宝塚記念　2016年　3着 68
京都大賞典　2016年 70
有馬記念　2016年　2着 72
大阪杯　2017年 74
宝塚記念　2017年　9着 78
ジャパンカップ　2017年　3着 80
キタサンブラック全成績 82

第二部
同時代ライバルと一族の名馬たち 84

［同時代のライバルたち］
ドゥラメンテ 86
サトノダイヤモンド 90
シュヴァルグラン 94
リアルスティール 98
サトノクラウン 100
カレンミロティック 102
マリアライト 104
ゴールドアクター 106
レイデオロ 108
アドマイヤデウス 110
サウンズオブアース 112

［一族の名馬たち］

サクラバクシンオー 114

ブラックタイド 118

ショウナンバッハ 120

第三部

キタサンブラックを語る 122

馬体 「ROUNDERS」編集長／治郎丸敬之 124

血統 血統評論家／生駒永観 128

走法・脚質・馬場適性 競馬ライター／福嶌弘 132

誕生 ヤナガワ牧場／梁川正普 136

特別インタビュー 背中を振り返る JRA騎手 武豊 140

第四部

キタサンブラックの記憶 146

ラストランで勝利を飾った名馬たち 148

一子相伝の名馬 152

返し馬からひも解く、王者の真の姿 156
キタサンブラックの旅立ち「お別れセレモニー」 160
名馬の単勝回収率 164
名馬の「逃げ」を支えた武豊騎手 168
マンガ 引退の花道…意地でも飾ってやんよ！ 172
座談会 キタサンブラックが駆け上った名馬への道 174
おわりに 184
執筆者紹介 188

写真／フォトチェスナット

本書中の表記は2023年6月現在のものです。

第一部 キタサンブラックかく戦えり

大阪杯に続いて挑んだ春の天皇賞も２番手からレースを進め、前年に続き連覇達成。

世紀の大一番

常識も血統論もすべて吹き飛ばした！
ひたむきにクラシック&古馬王道を駆け抜けた
みんなの愛馬の走りに希望をもらった

第76回　2015年10月25日

菊花賞GI

5番人気の伏兵がGI初勝利 データや常識を覆した3000m

個人的な話で恐縮だが、筆者はこれまで20年以上、競馬雑誌誌上でGIレースの本命を決めてきた。簡単に決められるレースもあれば、どの馬から入ればいいか迷うケースもしばしばある。

2015年菊花賞の2週間前、発表された出走想定馬を目にして、どの馬から入ればいいか見当がつかなかった。皐月賞とダービーを制した二冠馬ドゥラメンテが故障により不在。絶対的中心となる軸馬がおらず、一転して混沌となった。

上位人気は神戸新聞杯を制した上がり馬リアファル、皐月賞2着・ダービー4着のリアルスティール、ダービー2着のサトノラーゼンの3頭だったが、どの馬も信頼度では今一つ。人気の盲点となりそうな馬を探すべく、キタサンブラックの実績を見ると、買いやすい材料がいくつかあった。

京都コースは初出走だが、この馬は東京と中山の両レースで勝利を収めている。回り方（左

右）と直線の長さが異なる両方の競馬場で勝っている馬に、コース適性はそれほど求めなくていい。

状態面は◎。前走セントライト記念を勝って挑めるのは理想的だ。同レースと菊花賞の相性は神戸新聞杯よりも下なので、神戸新聞杯1・2着のリアファルとリアルスティールよりは下かも…とイメージした。レース前のリアルスティールとキタサンブラックの対戦成績はリアルスティールの2勝1敗である。

さらに、未経験の地元レースがどうなるかをイメージしてみた。競走馬の神経は繊細であり、初めての経験をすると気持ちが昂ぶり競走能力を発揮できないケースがよくある。そこで関係者が語る気性面を読み返すと、管理する清水久詞調教師は「落ち着きがあって余計なことをしない」、調教パートナーの黒岩悠騎手も「オンとオフがはっきりしていてメリハリの付け方が上手」と語っており、「ここは気にしなくていい」と感じた。

しかし、ネックとなる材料が二つあった。一つは馬体重。データが残っている29年間（86～14年）の3着以内馬87頭中69頭が４００キロ台である。セントライト記念でキタサンブラックは５３２キロだったが、この体重で勝った馬など皆無。予想的には超のつくマイナス材料だった。

もう一つは血統面。血統とはスタミナが要求される長距離ほど重要となる、と私的に感じ

ており、菊花賞と春の天皇賞では父と母系を1頭ずつチェックする。

父ブラックタイドはそれまで3頭の重賞ウイナーを輩出していたが、勝ち鞍の最長は１８００ｍ。距離面で万能型種牡馬であるディープインパクトの全兄だけに大丈夫かもしれないが、ブラックタイド自身は２０００ｍ以上の重賞レースで［０・０・１・７］。しかも母父は産駒の重賞勝ちがほぼ１２００ｍの「短距離型種牡馬」サクラバクシンオー。産駒の平地ＧⅠ勝利最長は１６００ｍ（朝日杯ＦＳとＮＨＫマイルＣを勝ったグランプリボス）である。「父に長距離適性があっても母系が大きく足を引っ張る」＝大きなマイナスファクターと感じた。ダービーで2番手を走りながら直線でズルズルと後退、結果的に14着と大敗していたのも、距離的に持たなかったからでは…と感じた。

結果、◎は皐月賞2着リアルスティール。皐月賞で同馬に2馬身半離されたキタサンブラックは△と評価し「馬券はリアルの単勝勝負」と記した。

２週間後の本番で、それまでの2番手追走の先行策から一転、キタサンブラックは5番手につけた。前半１０００ｍ60秒2、次の１０００ｍは64秒4。中盤でスローに流れた不利を感じたのか、後方数頭が坂越え手前で動くもキタサンブラックは微動だにしない。それが障壁となったのか、4コーナー手前では内の7～8番手。「前が壁になった」と多くの騎手が敗因で語るような状況である。

しかし、鞍上の北村宏司騎手は慌てなかった。前の各馬が外を走る中、最内をキープしたままようやく追い始めた。前を走るミュゼエイリアンとリアファルの間の狭い箇所を突くと懸命にムチを振るった。まさに気迫の籠った追い出しで、外から猛追するリアルスティールをわずかに退けた。

勝ち時計3分03秒9、上がり3ハロン35秒4はそれまでの菊花賞と遜色ない数値だったが、前後半の数値を見て驚いた。前半600mと後半600mとも35秒4で、両者を足すと70秒8。三冠馬ディープインパクトとオルフェーヴルはともに72秒0である。名馬2頭よりも前を走ったにもかかわらず、スタミナをキープしてラストの豪脚を爆発させた。

道中のペースに差はあるにせよ、先行してこれだけの脚を使うとは…。「前半は馬が我慢してくれた」と勝利者インタビューで北村宏騎手が語ったコメントを聞き「騎手にとってかなり乗りやすい馬だ」と感じた。

馬に触れたことなどない一介の予想者が重視した馬体重や血統のデータなど無関係の、本当に力強い勝ち方だったが、このときはディープインパクトに肩を並べる馬になるなど微塵も感じなかった。

多くの人が持っていた「競馬の常識」を根本から覆した名馬キタサンブラック。同馬の器の大きさを感じるたび、私は何度も「競馬には答えがない」と思えてしまった。**（小川隆行）**

いつもの2番手からの競馬が一転、直線5番手からの差し切りでGI初制覇を遂げた。

競馬の常識を覆した快勝劇

2000mの皐月賞3着後、2400mの日本ダービーを14着。前走で2200mのセントライト記念を勝つも「距離延長＝好材料」とは思われなかった。母系に短距離馬サクラバクシンオーの血が入っている。この血統背景がファンに「3000mは持たない」と思わせた。加えて京都コースは初出走。プラス要素の何倍もマイナスファクターが多い中、キタサンブラックは競馬の常識を覆す走りを見せ、自身のGI初制覇を飾った。

2015年10月25日

第76回 菊花賞 GI

京都　芝右　3000m　3歳オープン　晴　良

レース結果

着順	枠番	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	2	4	キタサンブラック	牡3	57	北村宏司	03:03.9		5
2	6	11	リアルスティール	牡3	57	福永祐一	03:03.9	クビ	2
3	8	17	リアファル	牡3	57	C・ルメール	03:04.0	1/2	1
4	2	3	タンタアレグリア	牡3	57	蛯名正義	03:04.2	1.1/4	6
5	1	2	サトノラーゼン	牡3	57	岩田康誠	03:04.4	1.1/4	3
6	3	5	ペルーフ	牡3	57	浜中俊	03:04.5	1/2	7
7	5	10	ブライトエンブレム	牡3	57	田辺裕信	03:04.5	クビ	8
8	4	8	ミュゼエイリアン	牡3	57	横山典弘	03:04.8	1.3/4	11
9	7	14	マッサビエル	牡3	57	戸崎圭太	03:04.8	クビ	10
10	7	15	ジュンツバサ	牡3	57	石橋脩	03:04.9	クビ	12
11	4	7	スティーグリッツ	牡3	57	内田博幸	03:05.1	1.1/2	4
12	5	9	アルバートドック	牡3	57	藤岡康太	03:05.3	3/4	13
13	8	16	タガノエスプレッソ	牡3	57	菱田裕二	03:05.3	アタマ	18
14	6	12	ワンダーアツレッタ	牡3	57	M・デムーロ	03:05.8	3	9
15	8	18	スピリッツミノル	牡3	57	酒井学	03:06.1	1.3/4	15
16	1	1	ミコラソン	牡3	57	武幸四郎	03:06.5	2.1/2	17
17	3	6	レッドソロモン	牡3	57	武豊	03:06.8	1.1/2	14
18	7	13	マサハヤドリーム	牡3	57	和田竜二	03:07.5	4	16

第62回　2017年12月24日

有馬記念GⅠ

〝感謝祭〟最高のシナリオを実現した、キタサンブラックの精神力

日本ダービーが競馬の祭典ならば、有馬記念は競馬の〝感謝祭〟だ。

アメリカの感謝祭は毎年11月第4木曜日。祝日にしたのはエイブラハム・リンカーンだという。多くの州では翌日も祝日とし、4連休の感謝祭休暇が一般的だ。有馬記念は12月4週目に行われ、また少し気が早い会社ではこの週末から年末年始の休暇が始まり、クリスマスと重なることが多い有馬記念は年末気分の入り口でもある。感謝祭は自然の恵みに謝意を捧げるが、ファン投票によって出走馬が選ばれる有馬記念は競馬ファンへのプレゼントであり、我々もまた1年間競馬を提供してくれた関係者に感謝を伝える祝祭空間と言える。ファンが見たい夢のレースを待つ時間は至福のひと時でしかない。

2017年、この年の祭りの主役キタサンブラックはこれが競走馬生活の大トリ、引退レースだった。ここまでGⅠ6勝を挙げている、まごうことなき名馬である。しかし、有馬記念三度目の出走となるキタサンブラックは、ここまで3着、2着と勝っていない。それどこ

ろか宝塚記念も3着、9着でありグランプリレースは未勝利。もちろん、すでに「ファンの馬」ではあったが、年末の風物詩であるグランプリを勝ってトリを飾りたかった。

そして、そのお膳立ては整っていく。ファン投票は圧倒的1位、さらに枠順抽選会では武豊騎手が残っていた中でも絶好枠とされた2番枠を引き、当然ながら単勝オッズは最終的に1・9倍と一本かぶり。さらに最終レース終了後にはお別れセレモニーまで組まれた。結果的に勝てたからハッピーエンドになったが、陣営はかなりのプレッシャーを背負っていたに違いない。勝てるだろうと思っても勝てないのが競馬というもの。この年、感謝祭がもっとも盛りあがるシナリオにはキタサンブラックの有馬記念制覇は欠かせないだろうが、それを完結させるために想像以上の緊張感を強いられる。やはり、有馬記念を2年連続で落としているという事実は重い。敗因はその都度、色々あれど、現実は現実。勝っていないレースを一発勝負で勝たなければいけないのは並大抵のことではない。

そのプレッシャーは名手・武騎手も感じていた。

「楽観視することは一つもなかった。1m、1mを丁寧に乗って、1mずつクリアした」

有馬記念3勝目の武騎手はレース後にこうコメントを残した。いつもスマートでどこか達観したところがある名手がこれほど慎重な心持ちを振り返るレースはあまりない。

中山芝2500mを先行脚質で挑む上では文句なしの1枠2番だが、それはスタートが決

まればの話である。実際、キタサンブラックは天皇賞（秋）で出遅れた。勝ったのでとやかく言われないが、ゲートに不安がないわけではない。ゲートで後れをとれば、たちまちライバルたちに進路を阻まれ、最初の3、4コーナーで位置を下げざるを得なくなる。勝たなければいけないプレッシャーを感じながら、先手を取るのは容易いことではない。だが、キタサンブラックはゲートを決め、先手を取った。これだけで勝ちを確信できるほど中山芝２５００ｍは素直なコースではない。正面スタンド前までは11秒台～12秒台前半とそれなりのラップを刻んだキタサンブラックは1コーナーあたりから13秒3－13秒2と一気にペースを落とした。正確無比な武騎手の体内時計と競馬を知り尽くしたキタサンブラックのリズムが一つになった。2番手シャケトラ以下、後ろは動けない。いや、この地点は動くべきではないからだ。キタサンブラックはそれを見越して、ラストに向けて息を整える。

そろそろ捕まえに行こうか。ライバルたちがそう感じるより一歩早く、キタサンブラックは3コーナー手前残り１０００ｍ地点から徐々にペースを上げていく。12秒2－12秒1－11秒7と来て、残り４００～２００ｍを11秒2で決めにかかる。これほど美しすぎる理想的な加速ラップはない。武騎手の慎重さがこのラップに集約しており、負けられない緊張感を背負い、それを跳ねのけることに全身全霊をかけた名手の仕事そのものだった。そんな完璧な競馬をこなすキタサンブラックの賢さもまた自身が超一流の競走馬であることを如実に示し

た。ここまで育て上げた陣営の馬との向き合い方もまた、このラップの向こうに見える。すべての関係者とキタサンブラックによるプロフェッショナルな仕事ぶりに感謝したい。心からそう思える競馬だった。

最後に念願のグランプリを勝ち、ＧＩ７勝目を挙げ、当時の歴代獲得賞金トップに躍り出たことも偉業だが、実はキタサンブラックのように5歳で秋の中距離ＧＩを2勝した馬はこの時点ではいなかった。3連勝を達成したテイエムオペラオー、ゼンノロブロイはどちらも4歳での達成で、5歳で1ヶ月おきにやって来る古馬中距離ＧＩをすべて走り、力をつけた3歳や充実期を迎えた4歳相手に2勝するのは難しい。付け加えれば、キタサンブラックはジャパンＣも3着なので、5歳秋シーズンをほぼ崩れず乗り切った。クラシックを勝ち、5歳の終わりまで結果を残したキタサンブラックのタフさ、長期間ピークを保ち続ける精神力は歴代名馬をも凌駕する部分だ。まして、レースはほぼ逃げるか好位から運ぶかの積極策。常にマークされる立場にありながらのＧＩ７勝はその記録としての価値をさらに高める。この頑健さこそがキタサンブラック最大の特徴なのだ。

17年有馬記念はキタサンブラックが締め、堂々と主役として盛大なるお別れセレモニーという祝福を受け、現役生活に別れを告げた。

レース後、薄暮の中山に響く豪快な歌声。これぞ、日本の祭りというものだ。　**（勝木淳）**

引退レースでもハナを切り有終の美。名馬たちに並ぶGI7勝目を挙げてターフを去った。

引退レースを見事に勝利した名馬

デビュー20戦目、引退レースとなった有馬記念。3歳時は3着、4歳時は2着と勝ち切れずにいたが、いつものようにハナを切ると直線でも天性のスタミナを発揮して優勝。シンボリルドルフやディープインパクトらの名馬に並ぶGI7勝目を挙げた。3着馬は前走ジャパンCで敗れたシュヴァルグラン。表彰式では前田健太投手（当時ドジャース）からトロフィーが渡され、レース後の「キタサンブラックお別れセレモニー」では武豊騎手からも笑みがこぼれた。

2017年12月24日

第62回 有馬記念 GI

中山　芝右　2500m　3歳以上オープン　晴　良

レース結果

着順	枠番	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム	着差	人気
1	1	2	キタサンブラック	牡5	57	武豊	02:33.6		1
2	2	3	クイーンズリング	牝5	55	C・ルメール	02:33.8	1.1/2	8
3	5	10	シュヴァルグラン	牡5	57	H・ボウマン	02:33.8	ハナ	3
4	7	14	スワーヴリチャード	牡3	55	M・デムーロ	02:33.8	クビ	2
5	6	11	ルージュバック	牝5	55	北村宏司	02:34.0	1.1/4	10
6	4	7	シャケトラ	牡4	57	福永祐一	02:34.1	3/4	7
7	8	16	サウンズオブアース	牡6	57	C・デムーロ	02:34.2	クビ	14
8	4	8	レインボーライン	牡4	57	岩田康誠	02:34.3	1/2	9
9	3	6	サトノクロニクル	牡3	55	戸崎圭太	02:34.3	クビ	11
10	1	1	ヤマカツエース	牡5	57	池添謙一	02:34.4	1/2	6
11	7	13	ミッキークイーン	牝5	55	浜中俊	02:34.5	1/2	5
12	2	4	ブレスジャーニー	牡3	55	三浦皇成	02:34.6	3/4	12
13	6	12	サトノクラウン	牡5	57	R・ムーア	02:34.6	ハナ	4
14	3	5	トーセンビクトリー	牝5	55	田辺裕信	02:34.8	1.1/4	15
15	8	15	カレンミロティック	セ9	57	川田将雅	02:35.1	1.3/4	16
16	5	9	サクラアンブルール	牡6	57	蛯名正義	02:35.5	2.1/2	13

第二部

同時代ライバルと一族の名馬たち

同世代に存在したとてつもなく強い馬とは？
雨中の激闘、リベンジ、復権はいかになされたか。
ライバルたちの蹄跡とともに振り返る

14着に敗れたダービーゴール前。優勝馬ドゥラメンテ（右）の独走状態に…。

同時代ライバル

ドゥラメンテ

多くの「もしも」を感じさせた、キタサンブラック同期の良血二冠馬

競馬の世界は、「もしも」という言葉で溢れている。大欅（おおけやき）の向こう側からサイレンススズカが帰ってくる。世紀の出遅れを免れたゴールドシップが、3連覇目がけ、まくってくる。そんな「もしも」の光景に思いを馳せてしまうのは、競馬ファンの性（さが）と言うべきか。

ドゥラメンテは、この「もしも」と縁深い二冠馬だった。破壊的な末脚で直線をぶち抜いていく姿はその名の通り〝荒々しく〟競馬ファンの心を揺さぶった。三度あったキタサンブラックとの対戦はいずれもドゥラメンテが先着。キタサンブラックの本格化を待たずにターフを去り、2021年8月31日、急性大腸炎によりわずか9年でその生涯を閉じた。

2頭が初めて相まみえたのは、15年の皐月賞だった。おだやかな気性と優れた先行力で順調に勝ち上がってきたキタサンブラックとは正反対に、ドゥラメンテは気性の難しさを抱えていた。レースに集中できず新馬戦と共同通信杯を取りこぼす。ドゥラメンテの牝系であるダイナカール一族の血は、勝負強さをもたらす反面、気性にも影響を及ぼす。有り余る闘争

心を抑え直線で末脚を解放できてこそ、ドゥラメンテの真価が発揮される。

レース後半、第4コーナーを先に回ったのはキタサンブラックだった。2番手から逃げ馬を捕まえると同時に、上がってきたリアルスティールとの激闘を開始する。ドゥラメンテもいよいよコーナーに差しかかるが、突然、鉄砲玉のように大外に弾け飛んだ。勝負を捨ててもおかしくない距離だが、ドゥラメンテは諦めない。体勢を瞬時に立て直し、残り1ハロンを一気に駆け上がる。勝つための競馬をしていたキタサンブラックとリアルスティールを飲み込むのには、数秒あれば十分だった。

この年のクラシックの幕開けは多くの競馬ファンに衝撃を与えた。2戦目の日本ダービーにおいても、ドゥラメンテは直線中央から抜け出し、堂々と二冠を達成してしまう。しかも父キングカメハメハ、さらにディープインパクトが持つダービーレコードを更新してしまうのだから、成長途中のキタサンブラックに付け入る余地はない。この時キタサンブラックは14着。菊花賞でのリベンジを誓い、運命の秋を迎える。

しかし、淀の舞台にドゥラメンテの姿はなかった。放牧先で骨折が判明、凱旋門賞はもとより三冠達成すら幻となった。主役不在の中、キタサンブラックは最後の一冠を手にする。もしも、この直線にドゥラメンテがいたのなら――。「強い馬が勝つ」と言われる菊花賞の舞台で、勝利の女神はどちらに微笑んだのだろう。真に強い競走馬はいったいどちらなのかと

直接対決を望む声は大きくなり、16年、宝塚記念で答え合わせが実現した。稍重の馬場を渾身のペースで逃げるキタサンブラック。古馬王道路線で力をつけファン投票で1位を獲得した同馬は、因縁の対決を制するため直線でリードを広げる。この状態をドゥラメンテが黙っているはずがない。見据えているのは凱旋門賞の頂点、こんなところで立ち止まっていられない。前方ではキタサンブラックが牝馬のマリアライトに並びかけられている。ならば2頭ごと抜き去るだけだ。ゴール前の3頭の攻防に、観衆は息を飲んだ。1着マリアライト、2着ドゥラメンテ。3着キタサンブラック。3歳クラシックでは何馬身もあったドゥラメンテとキタサンブラックの実力差は、今やハナ差というところまで来ていた。

入線後、ドゥラメンテは馬場の悪いところで躓(つまず)いて故障を発生。そのまま引退、種牡馬入りとなった。「もしも」この故障がなければ、ドゥラメンテは再びキタサンブラックと激突し名勝負を繰り広げたことだろう。その数年後、次は産駒たちの戦いが開始される。ドゥラメンテが獲得できなかった最後の一冠は、初年度産駒のタイトルホルダーが獲得。リラックスして逃げ切る姿は、奇妙なことにキタサンブラックによく似ていた。そしてキタサンブラック産駒のソールオリエンスは、大外から強烈な末脚を使い、23年の皐月賞を差し切り勝ち。その規格外の勝ち方に、瞬間、今は亡きドゥラメンテの面影を見た。「もしも」ドゥラメンテがまだ生きていたならば…この不思議な因果に何を思うだろう。

（吉田梓）

ドゥラメンテ

生年月日 2012年3月22日

血統 (父)キングカメハメハ
(母)アドマイヤグルーヴ
(母父)サンデーサイレンス

調教師 堀宣行(美浦)

獲得賞金 5億1660万円

通算成績 9戦5勝[5-4-0-0]

主な勝鞍 日本ダービー　皐月賞　中山記念

全成績

年月日	競馬場	レース名	距離	人気	着順	騎手	タイム	馬体重	勝ち馬(2着馬)
2014/10/12	東京	2歳新馬	芝1800良	1	2	F・ベリー	01:48.9	480	ラブユアマン
2014/11/8	東京	2歳未勝利	芝1800良	1	1	R・ムーア	01:47.5	474	(ショウナンハルカス)
2015/2/1	東京	セントポーリア賞(500万下)	芝1800良	1	1	石橋脩	01:46.9	488	(ウェルブレッド)
2015/2/15	東京	共同通信杯(GIII)	芝1800良	1	2	石橋脩	01:47.2	488	リアルスティール
2015/4/19	中山	皐月賞(GI)	芝2000良	3	1	M・デムーロ	01:58.2	486	(リアルスティール)
2015/5/31	東京	日本ダービー(GI)	芝2400良	1	1	M・デムーロ	02:23.2	484	(サトノラーゼン)
2016/2/28	中山	中山記念(GII)	芝1800良	1	1	M・デムーロ	01:45.9	502	(アンビシャス)
2016/3/26	UAE	ドバイシーマクラシック(GI)	芝2410良	3	2	M・デムーロ		計不	Postponed
2016/6/26	阪神	宝塚記念(GI)	芝2200稍	1	2	M・デムーロ	02:12.8	498	マリアライト

一族の名馬

サクラバクシンオー

キタサンブラックに伝えた血の不思議？母父に名を残す史上最強スプリンター

サクラバクシンオーは、生まれながらにしてスプリンターだった。その走りから、四半世紀以上経った今でも日本競馬史上最強クラスのスプリンターと称されている。

生涯戦績は21戦11勝、うち１４００ｍ以下に限ると12戦11勝。ＧⅠ初出走の壁に阻まれた４歳（旧馬齢表記、以下同）時のスプリンターズＳを除き、無類の強さを発揮した。逆に１６００ｍ以上のレースでは９戦０勝と全く勝てなかった。彼が生まれ持ってのスプリンターであることを証明するような戦績である。しかし、血統的に短距離向きだったかと言えば、そうではない。父サクラユタカオーは２０００ｍの天皇賞（秋）を制していて、母サクラハゴロモは、天皇賞（春）と有馬記念を制したアンバーシャダイの全妹である。また１歳上の従兄にあたるイブキマイカグラも、主に中～長距離で活躍を見せていたのである。

１９９２年、４歳１月のデビュー戦は中山１２００ｍのダート競走。レースでは２番人気ながらもスタートから先頭に立ち、５馬身差で圧勝する。そのレースぶりを見ると芝でもダ

ートでも関係なく走りそうな印象を受けるが、以降は全て芝レースに絞っていくことになる。続く2戦目の条件戦は、芝1600mだったが2着と好走。3戦目は同日同条件の古馬を0秒3も上回る好タイムで逃げ切り勝ちを収める。ここまで3戦2勝。デビューが遅かったとはいえ、クラシックを目指して皐月賞トライアルのGⅡスプリングS（芝1800m）に挑戦することになる。しかし、ここでは勝ったミホノブルボンに3秒5差の12着と大敗。スプリングSでの走りを最後に、サクラバクシンオーが中距離以上のレースに出走することは引退年の毎日王冠までなかった。再び短距離路線に矛先を向けたサクラバクシンオーは、次走GⅢクリスタルCで適性を遺憾なく発揮し、3馬身半差の完勝、重賞初制覇を飾った。

こうして、徐々に短距離界で頭角を現したサクラバクシンオー。5歳で迎えたスプリンターズSでは、この年の安田記念、天皇賞（秋）を制してマイル・中距離・スプリントの3階級制覇を狙うヤマニンゼファーが1番人気で、サクラバクシンオーに分厚い壁として立ちはだかった。ところが、蓋を開けて見ればヤマニンゼファーに2馬身半差を付けてのGⅠ初勝利。これはサクラユタカオー産駒として初のGⅠ制覇でもある。そして、連覇の懸かった翌年のスプリンターズSでは、勝敗に関わらずこのレースでの引退が決まっている中で、4馬身差の圧勝。1分7秒1という当時の日本レコードタイムで見事に連覇を達成した。スプリンターズS連覇という勲章をもって引退、種牡馬入りとなったサクラバクシンオー。しかし、

ＧⅠを2勝した馬であれば、他にも多数いる。ましてや、それ以上にＧⅠを勝利し種牡馬入りする馬もいる中、なぜ彼が未だに史上最強クラスのスプリンターと呼ばれるのだろうか。

その理由の一つに、5歳の秋に１４００ｍのＧⅡスワンＳを1分19秒９という好タイムで勝利したことが挙げられる。これは当時の日本レコードで、コースレコードとしては17年に更新されるまで23年間破られることがなかった大記録である。また、瞬発力を要する短距離戦において、そのスピードを維持するのは余程のことでないと難しい。ロードカナロアが登場するまでスプリンターズＳを連覇した馬がいなかったことも、サクラバクシンオーの評価を確固たるものにした要因だろう。

種牡馬として世に残した産駒は全部で１５６９頭。直仔たちの多くはサクラバクシンオーと同じく１２００ｍを得意とし、中でもショウナンカンプ（02年高松宮記念）、ビッグアーサー（16年高松宮記念）、グランプリボス（10年ＮＨＫマイルＣ）らが活躍。しかし、そうした適性を超えたかのように、母の父として孫のキタサンブラックが中～長距離のＧⅠを7勝している。これこそが競馬の醍醐味であり、だからこそ競馬は面白いと言える。そしてこの先も、彼の卓越したスピードは、子孫に色濃く受け継がれていくだろう。

（真実良）

サクラバクシンオー

生年月日 1989年4月14日

血統 (父)サクラユタカオー
(母)サクラハゴロモ
(母父)ノーザンテースト

調教師 境勝太郎(美浦)

獲得賞金 5億1549万円

通算成績 21戦11勝[11-2-1-7]

主な勝鞍 スプリンターズS(2勝)
スワンS　ダービー卿チャレンジT
クリスタルC

全成績

年月日	競馬場	レース名	距離	人気	着順	騎手	タイム	馬体重	勝ち馬(2着馬)
1992/1/12	中山	4歳新馬	ダ1200稍	2	1	小島太	01:11.8	482	(マイネルトゥルース)
1992/1/26	中山	黒竹賞(500万下)	芝1600良	1	2	小島太	01:35.1	486	マイネルコート
1992/3/14	中山	桜草特別(500万下)	芝1200良	1	1	小島太	01:08.8	486	(ハヤノライデン)
1992/3/29	中山	スプリングS(GII)	芝1800重	3	12	小島太	01:53.6	486	ミホノブルボン
1992/4/18	中山	クリスタルC(GIII)	芝1200良	1	1	小島太	01:08.6	482	(タイトゥルー)
1992/5/9	東京	菖蒲S(OP)	芝1400良	1	1	小島太	01:22.8	482	(エーピージェット)
1992/6/7	東京	ニュージーランドT4歳S(GII)	芝1600良	3	7	小島太	01:36.0	486	シンコウラブリイ
1992/9/13	中山	京王杯オータムH(GIII)	芝1600良	3	3	小島太	01:33.0	490	トシグリーン
1992/10/31	東京	多摩川S(OP)	芝1600良	3	7	小島太	01:33.5	484	キョウエイボナンザ
1992/11/28	東京	キャピタルS(OP)	芝1400良	1	1	小島太	01:21.1	484	(ミスタートウジン)
1992/12/20	中山	スプリンターズS(GI)	芝1200良	3	6	小島太	01:08.3	486	ニシノフラワー
1993/10/2	中山	オータムスプリントS(OP)	芝1200良	2	1	小島太	01:08.8	492	(フィルードヴォン)
1993/10/30	東京	アイルランドT(OP)	芝1600重	3	4	小島太	01:35.5	492	イイデザオウ
1993/11/27	東京	キャピタルS(OP)	芝1400良	3	1	小島太	01:21.2	496	(エアリアル)
1993/12/19	中山	スプリンターズS(GI)	芝1200良	2	1	小島太	01:07.9	500	(ヤマニンゼファー)
1994/4/3	中山	ダービー卿チャレンジ(GIII)	芝1200良	1	1	小島太	01:08.9	500	(ドージマムテキ)
1994/5/15	東京	安田記念(GI)	芝1600良	3	4	小島太	01:33.7	498	ノースフライト
1994/10/9	東京	毎日王冠(GII)	芝1800良	4	4	小島太	01:45.0	496	ネーハイシーザー
1994/10/29	阪神	スワンS(GII)	芝1400良	1	1	小島太	01:19.9	494	(ノースフライト)
1994/11/20	京都	マイルCS(GI)	芝1600良	2	2	小島太	01:33.2	496	ノースフライト
1994/12/18	中山	スプリンターズS(GI)	芝1200良	1	1	小島太	01:07.1	504	(ビコーペガサス)

馬体

馬体と血統の間に大きなギャップのある、突然変異的な名ステイヤー

「ROUNDERS」編集長　治郎丸敬之

「典型的なステイヤー（長距離馬）の馬体は？」と訊かれたら、かつてはスペシャルウィークを真っ先に挙げていたが、最近はキタサンブラックと答えるようにしている。ちなみに、スプリンター（短距離馬）は、かつてはアグネスワールドであったが最近はビッグアーサーである。スペシャルウィークとキタサンブラックに共通しているのは、首や手肢がスラリと長く、胴部にも十分な伸びがあり、何と言っても、馬体の幅が薄いこと。真横から見ると案外わかりにくいが、馬体を正面から見たときに、肩端から肩端までの距離が短い。この馬体の薄さこそが、ステイヤーとしての馬体の特徴なのである。

馬体が薄いと、特に幼少期や若駒の頃はヒョロッとしてどうしても頼りなく映るため、あまり評価されないケースも多い。キタサンブラックも例にもれず、誰もが我先にと買い争った馬ではなかったという話を耳にする。少なくとも、誰が見てもうっとりするような好馬体ではなかったということだろう。ステイヤーとしてはそれほど珍しい話ではなく、むしろ名

ステイヤーで似たようなエピソードを持つ馬も少なくない。

私もキタサンブラックの強さに気づくのが遅かった人間の一人である。そもそもキタサンブラックが生粋のステイヤーであることさえも認めるのに時間がかかった。「馬体論者のくせに、典型的なステイヤーの馬体を誇るキタサンブラックの適性を見抜けなかったのは情けない」と言われたらグウの音も出ない。馬体だけを見るとキタサンブラックはステイヤーであるが、血統的には母の父にスプリンターのサクラバクシンオーがいるため、私を含め多くの競馬ファンがキタサンブラックには３０００ｍ以上の距離は長いと考えたのである。

この、キタサンブラックのステイヤー適性を見抜くのが遅れた件に関しては、今でも反省している。私は馬体だけを見ていなかったのである。キタサンブラックは馬体と血統の間に大きなギャップがある、突然変異的な馬であった。

先ほど、キタサンブラックとスペシャルウィークを新旧ステイヤーの典型的な馬体として挙げたが、実は2頭の馬体にも違いがある。それは体高（背の高さ）である。どちらも幅の薄い馬体であることは同じだが、スペシャルウィークは４６０～４７０キロ台の馬体で走ったのに対し、キタサンブラックは最終的に５４０キロ台の馬体で走った。どこが違うかというと、体高（背の高さ）である。キタサンブラックは縦に大きいのだ。

キタサンブラックの体高は１７２センチと、私の知る限りにおいて、現役の種牡馬の中で

最も背が高かった。現役の種牡馬たちを背の順に前ならえすると、キタサンブラックは一番後ろであったということだ。高かったと過去形になっているのは、今年から日本で供用されることになった173センチのウィルテイクチャージに抜かされてしまったからだ。ちなみに、キタサンブラックの次に背が高いのは171センチのサトノアラジン、170センチのラニ、169センチのダノンバラードと続く。一番背が低いのは、159センチのニューイヤーズデイである（ニューイヤーズデイはその分横幅があってマッチョであるが…）。

背が高くて、縦に大きい大型馬であることは、キタサンブラックの馬体の最大の特徴である。この特徴こそが今の日本競馬で求められていること〝そのもの〟なのだ。簡単に説明すると、馬場の高速化に伴い、日本馬の大型化も顕著になってきている。日本の馬場は極めてフラットで走りやすいため、大型馬がバランスを崩すことなく、その馬体の大きさをそのまま最大限に生かしてスピードを発揮できる。ダートだけではなく、芝の短距離戦でも中長距離戦でも、馬体の大きい馬の活躍が目立つのはそういう理由である。

ところが、馬体の大きさが求められるとはいえ、横幅の大きさにはさすがに限界がある。あまり横幅が大きすぎても、豚のようになってしまい、スピードとスタミナが削がれかねない。横に限界があるとすれば、縦に大きくするしかないのだ。例えば陸上選手で言うとウサイン・ボルト（身長195センチ、体重94キロ）のような大きな馬が求められているというこ

とである。

体高が172センチで馬体重が540キロ台というキタサンブラックは、現代日本競馬における理想的な馬体なのである。

最後に種牡馬としての話をしておくと、イクイノックスやソールオリエンスが出たからでもあるが（彼らは突然変異的である）、キタサンブラックの未来は明るい。その根拠としては、産駒に背が高くて、馬体全体が大きいという特徴を強く伝える点が挙げられる。

クラシック戦線を席巻（せっけん）するような大物を出しつつも、どのような条件でもコンスタントに力を発揮して走る産駒たちを続々と誕生させる以上、キタサンブラックがリーディングサイアーとなるのも時間の問題かもしれない。

キタサンブラック

2017年
有馬記念

引退の花道…意地でも飾ってやんよ！

漫画 UMANIACひい

【2015年 皐月賞】
1着 ドゥラメンテ
（騎手 M. デムーロ）
3着

【2015年 日本ダービー】
1着 ドゥラメンテ
（騎手 M. デムーロ）
14着

キタサンブラック

浜中騎手

北村(宏)騎手

ごめんなぁ

いやいや

俺の実力不足ってやつよ…

和の心「菊」…

カッ

菊花賞は絶対に負けられねぇ！

祭りだ！淀は祭りだ！キタサン祭りだ!!

ワァァァ!!

パッ!!ン

京都11R	確定
単	4
複	11 クビ
枠	17 1/2
馬	3 1¼
馬	2 1¼

ついに俺の時代がきたってか

フッ

——と思ってたのに

【2015年 有馬記念】
2着 サウンズオブアース
（騎手 M. デムーロ）
3着 キタサンブラック

惜しかったネ

…おい

【2016年 宝塚記念】
2着 ドゥラメンテ
（騎手 M. デムーロ）
3着 キタサンブラック

惜しかったネ

くやしぃ〜〜〜

おいおいおいおい

俺の天敵はコイツだ…！
ハァ
ハァ
いつも俺の前にいやがって…！
おい！
今日こそ負けねぇぞ！
ビシィッ
?
【2017年 ジャパンカップ】
1着 シュヴァルグラン
騎手 H.ボウマン
……
2着 レイデオロ
騎手 C.ルメール
3着
【2016年 有馬記念】
1着 サトノダイヤモンド
（騎手 C.ルメール）
2着
ズコ
僕たちも忘れないデ
くそう…
デムだかルメだか知らねぇが
こちとら日本の宝武豊を背に走っとんじゃい
キッ
引退の花道…意地でも飾ってやんよ！
【2017年 有馬記念】
1着 キタサンブラック
（騎手 武豊）
ワーッ!!
これが男の引き際だ――！
キタサンブラック――!!
どんなもんでい！
参りマシタ～～～
パチパチ
完
第62回
グランプリ
有馬記念
2017

座談会

キタサンブラックが駆け上った名馬への道

〈出席者〉

勝木淳（競馬ライター）

小川隆行（編集者）

緒方きしん（ウマフリ代表）

データや常識を信じる限りその凄さに気づけない！
考えれば考えるほど大きな謎に突き当たる。
目撃者三人が語り尽くすキタサンブラックの真実とは

2016年は秋の王道3レースを走り切った。写真は逃げ切り勝ちを収めたジャパンC。

最初は注目が遅れた、3連勝で重賞を制した素質馬

緒方：キタサンブラックはデビューから3連勝で重賞制覇と、今振り返ると華々しい滑り出しを見せているんですが、実際のところは大注目の素質馬という扱いではなかったですよね。皆さんがキタサンブラックを意識し始めたのはいつ頃からですか？

小川：俺はかなり遅いよ。ダービーを敗れて「ここまでか」と。これほどの馬になるなど思いもしなかった。菊花賞を勝って驚いたのを覚えている。

勝木：私は2戦目の単勝を当てたから覚えていますね。清水久詞厩舎は関東遠征が多いんですが、「清水厩舎らしい遠征だな」と思って買いました。

緒方：2戦目って、9番人気48・4倍ですよね。それは羨ましいなぁ…。

勝木：フェブラリーSの週でしたね。懐かしい。緒方さんの言う通り、3番人気・9番人気というスタートだから、いわゆるイマドキの人気馬・血統馬とはちょっと違うタイプ。活躍し始めてからようやく見返すタイプの馬ではありますね。

小川：俺もそうだな、後から見返した。

緒方：僕はスプリングSまで、ほぼ意識したことはなかった気がします。スプリングSでも、世代トップクラスの注目馬リアルスティールが出走していましたし、ベルーフはステイゴールドの牝系でPOG指名していたので、どうしてもそちらに気持ちが向いていました。

勝木：馬券的にも美味しい馬でしたよね。ただ、今になって考えると、新馬戦は速いペースで逃げて、2戦目は遅いペースで差しているので、最初から厳しい競馬を乗り越えてきたことになります。早いうちからセンスを発揮していたんですよね。逆に3戦目以降は恵まれた展開が多くなっていったので、実力を把握するのが少し遅れました。

緒方：早くから素質を見抜いておきたかったです。本当に悔しい…。

ダービーでの大敗を乗り越え、菊花賞を制覇

小川：皐月賞は恵まれたよね。だからこそ、ダービーの大敗は、距離がもたなかった、と思っていたよ。

勝木：ダービーで馬体重プラス10キロというのも判断が難しかったです。そもそもダービーは各陣営が究極に仕上げてくるから馬体増が少ないのに、二桁プラスとは…。緩めに仕上げずに、厳しい調教を積ませる厩舎なので、なおさらね。

小川：ダービーは鞍上の緊張が伝わっちゃっていたんじゃないかな。北村宏司騎手はバリバリGⅠを勝ちまくっているタイプというわけでもないし、ダービーという特別なレースの経験が不足していたのかもしれない。

緒方：馬体重に関しては、皐月賞でプラス6キロ、ダービーでプラス10キロ、さらには夏を越してセントライト記念でプラス12キロと、大きく増やし続けたんですよね。何度も〝結果的に〟という言い回しになってしまいますが、後から考

えると凄まじい勢いで成長していただけなのでしょう。そのセントライト記念では6番人気を跳ね返して勝利、重賞2勝の皐月賞3着馬として、堂々、菊花賞に進みました。

小川：長距離って、500キロを超える大型馬は手が出にくいじゃない。キタサンブラックは立派な馬体だけど、それだけに「こりゃあセントライト記念くらいの距離が精一杯だろうなあ」と判断してしまった。あまり記憶にないタイプのステイヤーだよね。過去のステイヤーたちが築き上げてきた常識を覆した。やっぱり競馬って答えがないやって思っちゃったもんなぁ。

勝木：キタサンブラックやキタサンブラック産駒は、ジンクス壊し屋ですからね。データ派にとっては天敵と言えるでしょう。条件が全然違っても走ったりするし…。

小川：本当、異次元の馬。俺、菊花賞の前に皐月賞とダービーの着差を確認したりするんだよ。皐月賞は勝ち馬と0秒6差、ダービーでは2秒3差。ダービーでの負け方を見て、これほどの名馬になるとは思わなかったんだよなぁ。

勝木：母父サクラバクシンオーもネックでしたよね、菊花賞は。

緒方：異例ですもんね。もちろんキタサンブラックは菊花賞の出走時点で重賞を二度制していますし、その強さは多くのファンや関係者が認めていたとは思いますが、単勝人気を見ても、人気先行型というタイプではなかったと言えますね。ですがその菊花賞も5番人気で、上がり最速の差し切り勝ちを収めています。

勝木：北村宏騎手はこの時期がキャリアのトップとも言える時期。特に菊花賞は、追い方のアクションが激しくて「あれ、北村宏騎手っぽくないな？」と思うほどだった。それほど気迫を感

じる追い方でしたね。

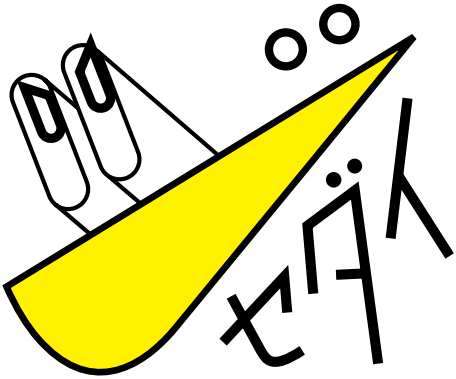
逃げ馬としての才能開花、そして名コンビ誕生

小川：怪我による有馬記念での乗り替わりは、北村宏騎手にとっては無念だったろうね。

勝木：ただ、それがこの馬のターニングポイントだったかもしれません。乗り替わりとなった3歳の有馬では、横山典弘騎手があえて前に行かせているんですよ。それまではあえて逃げさせずに我慢の競馬をしてきたから、スタート直後の3コーナー付近ではキタサンブラックも耳を立てて戸惑っているんです。ところが、1コーナーの手前あたりからは先頭を走ることに納得している。賢いんですよね、この馬は。そしてここが覚醒のキッカケなんだな、と改めて思います。横山典騎手は一度しか乗っていないですが、この走りは確実に、翌年以降のヒントになったことでしょう。

小川：キタサンブラックは、色々な競馬に順応するよね。気性にムラがないというか、良い意味で機械のような馬だと思ったよ。

緒方：自分も気性面のクセがない馬だと思っていて、常にベストパフォーマンスを出すタイプだと思っていたんですが、本書で緑川あさねさんが書いてくれた返し馬のコラムを読む限り、意外とその日のやる気にオンオフあるタイプだったんだな、と驚かされました。武豊騎手が、ほぼ毎回ベストなやる気を引き出していたのかもしれませんが。



何と闘うか？

https://ji-sedai.jp

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント　著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！　行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研　若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み　既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!